神凪町奇想譚

瀬河ナツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
神凪町奇想譚

【Ｎコード】
Ｎ３１７４Ｚ

【作者名】
瀬河ナツ

【あらすじ】
親が死に、妹と町から逃げ出した少女。家出の中でさまざまの人に出会い、学び、成長していく物語。どちらかといえばシリアスが多くなりそうな物語が今始まる。
※この作品は恐らく多重クロスです。そういうが苦手な人はブラウザバックを押してください。でも、一回でも読んで下さるとうれしいです。

プロローグ（前書き）

ようやく完成しました。いろいろとツッコミ所はあると思いますがやさしい目で見守ってくださるとありがたいです。

プロローグ

――――ざぁぁぁぁぁ

鬱陶しい程に雨が私達に降り注ぐ。それはまるで泣かない私達の代わりに泣いているかのように、私は妹と共に両親が眠っている墓石の前で傘を差しながら突っ立っている。すると沈黙に耐えかねたのか妹が、

「……ねぇ、おねーちゃん。おとーさんとおかーさんはどこにいったの？」

と聞いてきた。まだ幼い妹の事だ、私達がここにいる理由が分からないのだろう。それを私は年相応で可愛らしいと思う気持ちと、理解する事が出来ない事に対する羨望だった。妹はこんなにも年相応の子供っぽさを持っているのに、私にはそれがない。まだ六歳と子供なのにだ。だからこそ、私は年相応の幼さを持つ妹が羨ましかった。

「お父さんとお母さんはね、遠いところに行ったの」
「とおい、ところ？」
「そう、私達には遠すぎて行けないところに行っちゃったの」

真実を少し濁して妹の質問に答える。我ながら美味い濁し方だと思う傍ら、こんな事が出来る私に自己嫌悪する。……私も、妹みたいに子供っぽかったらこんな思いはしなかったのに……

「……ねぇ■■、私もちょっと出かけてくるから、友達の家で待っ

ててくれる？」
「……おねーちゃんもどっかいっちゃうの？　おねーちゃんは帰ってくる？」
「……うん、いつか必ず帰ってくるから、それまで待っててね」
そう言って私は妹を連れて墓場の入り口で待っていてくれている両親の知人の所に行く。私も何回か遊びに行ったことがあって、この町で神職をしているらしく、両親の葬式の時に妹の面倒を見てくれと言ったら少し渋ったが承諾してくれたのだ。

「……本当に行くのかい？　前も言ったけどあんたも引き取ったって構わないんだよ？」

その方が友達も増えてあの子も喜ぶだろうし。そう、待っててくれた二人の女性の一人が言ってくれる。それは完全な善意の元に言ってくれた言葉なんだろう。確かにその言葉は嬉しかったし、受け入れるか少し悩んだ。でも、

「……いいんです。私一人ならなんとかなりますから」
「一人ならって、あんたまだ六歳「言っても無駄だよ」……どうしてだい？」
「この子もただ言っただけじゃないと思うからね。きっと何を言っても考えは変えないだろうね」

そう言ってもう片方の女性が片方の女性を止めてくれた。そして、二人して私の眼を覗いてくる。二人の眼には私の眼がどう映ってるのか分からないけど、二人の眼に反射した私の瞳は透き通っているけど、意思の篭ってないガラスのような空色の瞳が見えた。

「……なら仕方ないね。でも、何かあったらいつでもこっちに来ていいんだからね。神様は人に救いを与えるのが仕事なんだから」

「そうだよ。あんたはまだ若いんだから。何かあったらいつでもこっちにおいで。妹ちゃんは私達が全力で守るからね」
「……ありがとうございます。では、私はもう行きますね」

そう言って私は妹を預け、歩き始める。

――――そう、この日私は妹も、自分の住んでた町も捨てたのだ。ここにいたら両親の思い出に浸って前に進めそうもないから、妹と一緒にいたらいつか大変な事を起してしまいそうだったから、それが怖くて私はここから、神凪町から逃げ出したのだ。

「と言ったもの、その前に荷物とか整理しないと……」

とまぁ、シリアスにいこうと思ったんだけど、そうはいかず、私は今自分の家に戻って荷物を整理している。この町を出るにしたって、お金とか必要だしね。というか私の口調も性格もさっきと違う？　あぁ、これは一人の時の口調で誰かといる時はあの口調だよ。

まぁ、外用の仮面みたいなもんだよ。

「えーと、まずはお金でしょ、体術や剣術の技術書でしょ、後は……」

そこで、ふと思い出したのかのように私は立ち上がり、父の部屋に移動する。父からは入っちゃダメと言われていたが、その父ももういない。その事を改めて実感し、少し胸が痛む。でも、それを振り切って私は父の部屋をあさり始める。

「……多分ここら辺にあると思うんだけど……あ、あった」

本棚の後ろを探しているところ、手に何か当たるものがあった。それを引っ張り出してみると、なんか棒状的な物が入った袋があった。さらに中の物を取り出してみると、中には二本の刀が入っていた。

「えっと、これだよねお父さんの刀って……？　よっと、って重っ……流石に持つのが限界かな……？　振るうなんてとてもじゃないけど出来ないや」

試しに手に取ってみるとずしっとかなりの重量感があって持っているのが精一杯だった。でも、背負う事なら出来るかも……そう思って試しに袋に入れて袋の肩紐に両肩を通して背負ってみると、重いけど背負えない重さではなかった為、背負って持っていくことにする。父の部屋にもう用はない為、父の部屋を出ようとして最後に父の部屋に振り向いて、

「……お父さん、お父さんの刀を借ります。返す事はないと思いますけど、大切に使わせてもらいます」

そう言って私は父の部屋から出た。といってもまだやる事はいっぱいあるからまだ家は出ないけど。さてと、次にやらないといけないのは……拠点探しかな？　この町を出るなら誰かの家に行かないといけないし……というか、とりあず剣術の練習が出来るところがいいかな？　とりあえず両親の仕事のコネを伝ってみよう。

――――しばらくお待ち下さい――――

「はぁはぁはぁ、やっと見つかった……お父さん達コネ多すぎでしょ……」

うぅ……さっきは大人なびた性格が恨めしいといったけど、この子供な身体も恨めしい。作業するのも一苦労だよ……せめてどっちかに傾いてくれればよかったのに……いや、六歳なのに大人の体とか嫌だけどね。それはともかく、私が行くべき場所はなんとなく決まった。後はそこに行って稽古つけて貰えるか頼むだけだ。

「さて、お金よし、本よし、刀よし、行き先の住所よし、後は……一応確認しておくかな？」

そう言って私は台所に赴き、包丁を取り出し、意識を集中させる。

――――それは赤く燃え滾る灼熱の炎。闇夜を照らす明るい光。

「創造（Ｂｒｉａｈ）――――」

そう呟くと同時に包丁から炎が放出され始める。……はぁ、成功して欲しくなかったけど成功しちゃったか……。そう、これは私が

生まれた時から持っていた能力、『自身が想像した性質を創造し、物質に付加する能力』だ。正直私はこの能力(ちから)が好きじゃないてか嫌いだ。自分の異常性を改めて認識しているみたいだから。自分が普通じゃないと思わせる決定的なものだから。……本当にこの性格も能力もなかったら良かったのに……そうすれば、今も妹と――――

「――――って今更何を考えているんだ私は。やめやめ、準備を終わったしさっさと出発しよう。ここにいると負のスパイラルに陥りそうだからね」

とにかくさっさと家から出よう。そう思って荷物を纏めて家を出ようとしたとき、

――――ざぁぁぁぁぁぁ

……うん、そういえば雨降ってたね。うん、すっかり忘れてたよ……。というかスッゴい土砂降りなんだけど……これは今日出発するのは無理かな……？　うん、明日必ず出発しよう、そうしよう。

「はぁ……とりあえず夕飯の仕度しないと……」

完全に出鼻を挫かれて意気消沈気味になってしまった私は速攻で夕食を取って、明日に備えて早く就寝しました。べ、別に悲しくなんかないんだからね！

プロローグ（後書き）

作者の言い訳
主人公の年と口調について＞一番は口調を子供っぽくするのがものすごく抵抗があった為、少し丁寧で大人びた感じにした。素は年相応の性格。
とまぁ、今回はこんな感じです。あと、今回は主人公が結構強い作品ではなく、かなり弱い部類に入ると思います。
次回からは少し進展させていきます。それでは、また次回お楽しみに下さい。

第一話（前書き）

意外と早く書きあがったのでこっちも更新です。では最新話どうぞ

第一話

――――夢を見た。父親が死ぬときの夢を、

『――、大――か？　よ――――無――――……』

――――ねぇ、お父さん、何を言ってるの？　よく聞こえないよ。

『――――は残っ――か……。――――うまく――ていると――いんだ――――』

――――ねぇ、お父さん。どうしてそんなに死にそうな顔してるの？　なんで、そんなに血だらけなの？

『――――こにいて――――守って――くれ。大――だ。俺――――強――らな……』

――――そんな傷だらけじゃ説得力ないよ……。でも、分かった。――は私が守るから、お父さんは安心して行って来て。

『そう――、もう――――の誕――――ろ？　実はも――ってある――――。――にある――――、――でて――ぞ。なぁ――、プレ――――は――買え――――』

――――え？　どこに置いてあるの？　聞き取れなかったよ。

『じゃあ、――てくる――』

――――うん、行ってらっしゃい、お父さん。待ってるから、必ず帰って来てね。死んじゃダメだよ。

――――そして、

『ゴホッゴホッ！　はぁ、――で―後か……』

――――お父さん、

『……――、すま――な……俺はも――――たいだ……』

――――お父さん、

『くそっ、――――まれて、――――から小学校に――――ていう――な時に――――になる――て……』

――――お父さんっ、

『でも、――――ないか、―も――も沢山――――したからな……――応報って奴か――』

――――お父さんっ！

『あぁ、――つの真似じゃ――――ど、今日は――――にも――綺麗だ……』

「うわぁぁぁぁぁぁ！　お父さんっ！　……あれ？　もしかして夢

……？」

……だとしたらなんて嫌な夢を見たんだろう。父の、お父さんの死ぬ間際の夢を見るなんて……。悪夢にも程がある。

「……よし、気を取り直して、朝食食べて、今日の弁当を作って出発しよう」

そうやって自分に言い聞かせて立ち直り、私は朝食の支度をし始める。……そうだ、立ち止まってなんていられないんだ、自分の為にも、妹の為にも。

「さて、天気もいいですし今度こそ出発ですね」

と、一気に時間を飛ばして朝食を食べ終え、一応非常食とおにぎりを鞄に入れておきます。ある事にしたことはないですし。さて、では出発する前に……、

「……お父さん、お母さん、行ってきます。いつか必ず帰ってきますから、それまで待っていてください」

……では、行きますか。そう思い、家に背を向けて歩き始めようとしたその時、

「あー、いたいた。よかった、まだ出発してなかったみたいだね」

昨日の女性二人が私を訪ねて来たみたいです。はぁ、なんで私が出発しようとするとこうやって出鼻をくじかれるんでしょう？

「……どうしました？　私は今から出発する予定なんですけど」

「……やっぱりその口調は変わらないんだねぇ……というか昨日は出発しなかったみたいだね」

「まぁ、あんな土砂降りの中出発する必要はないですし、それに傘を持ってくような荷物の余裕は有りませんし」

「だったその刀を置いていけばよかったんじゃないの？　それ、あいつの刀でしょ？」

それは無理です。命狙われた時どう対処すればいいんですか？……はいそこ、どうせ重すぎて刀振れないのにどうすんだ？　とか言わないでください。遠心力を味方にすればきっと……間違いなく肩が外れますね。はい、無理です。でも刀は持っていきます。

「……それで、そんな事は置いといて、一体どうしたんですか？出発するのを止めに来んなら全力で抵抗しますけど」

そう言いながら私は二人を睨みつけます。本当にそうなら全力で走れるように姿勢を少し低くしておく。

「まぁ、そう身構えなさんな。私達は別にあんたを止めに来たわけじゃないよ」

「……そうなんですか？」

「うん、私達が今日来たのはこれを渡すためさ」

そう言って二人から手渡された物は幾つかの紐の輪が重なっていて、ところどころに翡翠色の石のついたブレスレットでした。……なんでしょう、このブレスレットからとてつもない力を感じるのですが……、

「私達のお手製だからね、加護も半端ないと思うよ」

「……そんな物貰っていいんですか？　他にも渡すべき人は居るでしょう？」

「まぁ、それはそうなんだけどね。これから旅立つあんたへの餞別さ。それなら身につけておくだけだし、荷物もならないだろう？」

……私も妹も、この人達には本当にお世話になりますね。

「ありがとうございます。これ、大切にします。それでは、もう行きますね。いつか必ず、帰ってきますから……！」

「あぁ、あんたの妹と待ってるから、何時でもおいで、私達は大歓迎だから。だから、そんなに泣くんじゃ無いよ」

「うん、また遊ぼうね……莉紗」

「……はい！」

こうして、私はここから、神凪町から旅立った。

「さて……張り切って行こうと思ったんですけど……ここ、どこでしょうか？」

私は今、目的地へ向かうための山道を歩いているのですが……完全に道に迷いました。でもまだお昼ですし、少し昼食がてら休憩を取りましょう。そう思ってどこか座れる場所を探していると、

――――人が倒れていました。

……うん、見なかった事にしましょう。流石に行き倒れをどうにかするような余裕はありませんし、

「さ、さぁて……どこか休憩出来る場所を探しｔ「たぁ……すぅ……けぇ……てぇ……！」きゃぁぁぁぁぁ！」

こ、怖いです！　なんかゾンビみたいな途切れ途切れな声を出してきて怖すぎます！

「み、みずぅ……！」
「み、水ですか……？」
「……（こくこく）」

既に喋る事も億劫なのか頷くだけになった女性にペットボトルに入ったお茶を渡す。すると女性はひったくるかのように奪い取り、一気に飲み始める。

「――――ぷはぁっ！　あー、生き返るぅ！　ありがとう！　助かったわ！」
「は、はぁ、それは何よりですが……どうしてこんなところに居る

んですか……？」
「えーっとねぇ……ふらふら目的地に向かって歩いていたら迷ってた」

……この人、かなりの方向音痴です。というかいつの間にかって……女性の人は顔とかに土が付いていますが、キレイな顔付きをしていて、肩に私が持っているような袋ってまさか……この人、

「あの……もしかしてその袋の中には……」
「ん？　ああ、そうだよ。多分君のご察しの通り、中には私の愛刀が入ってるよ」

……間違いなく父とかと同業者ですよこの人。

「それよりも、私はあなたが何者かが気になるかな？　あなたが持ってる袋の中に入っているのも刀でしょ？」
「……あなたは一体？」
「私は桜御影（さくらみかげ）、今は自称だけど、いずれは世界最強の女剣士になる予定の女よ」

……桜御影。どっかで聞いたことがあるような気がしますが……何処ででしたっけ？　確か父が言ってた気がするんですが……うーん、思い出せません。

「で、あなたは一体なんなの？　場合によっては斬らなきゃいけないんだけど」
「……私は川里莉紗。ちょっと諸事情により家出してあるところに向かっている途中のただの六歳児です」
「はいダウト。あんたみたいな六歳児いるわけがないでしょう！」
「そんなの自分で自覚してますよ！　でも実際に六歳なんですから

しょうがないじゃないですか！」
「事実だとしても流石に大人び過ぎでしょー！？　私より大人びているわよー！　というか諸事情とかそんな単語どこで覚えてるのよー！？」
「そんなの私が知るかぁー！　てか私の方が大人びてるっておかしいでしょー！？　ついでに私の知識は大抵読書によるものだー！」

〜〜〜〜カオスが続いてますのでしばらくお待ち下さい〜〜〜〜

「はぁ、はぁ、はぁ！　ろ、六歳児に言葉で負けるなんて……！」
「なめ、るな……伊達に一日二、三冊ペースで、本を読んでいないよ……！」

ふ、不毛な戦いだった……！　というかどうして喧嘩してたんだろう私？　昼食取ろうとしてた筈なのになぁ……、

「そんな事より、さっきと口調が変わってるわね。そっちが素なのかな？」
「……あ。……な、なんの事ですか？　言ってる事が理解できないんですけど」
「今更繕っても遅いわ。素でいいよ」

くぅ、あの恐怖の時点で軽く仮面が剥がれそうになっていたからとはいえ、こうも簡単に剥がされるなんて……不覚。

「さて、それでどうして家出なんてしてるのかな？　私も家出している身だけど、中学卒業してからよ。流石に六歳の時から家出なんてしないわよ」
「……はぁ、そっちがいいって言ったから素で話すけどね、私の両親、こないだ殺されたんだ」

「……あぁ成る程、川里ってどこかで聞いた気がすると思ったらあなた、あの川里の一人娘なのね。……成る程、これが魔女と御神の娘かぁ……」

あれ？　一人娘って妹もいるから二人の筈なんだけどな……。それに最後の方はぼそぼそとしてて聞き取れなかったし……そしてあの川里って何さ？

「それで、両親が殺された敵討ちの為に家出したの？　やめた方がいいと思うよ、今のあんたじゃ人一人殺せない。ただ無駄死にするだけよ」

「んな実益のない事はしないよ。今守れないものよりも今守れるものを守りたいから、その力が欲しいから家出したの」

「ほぅ、つまりあんたは、川里莉紗には守りたいものがあると。例えば？」

「お父さんとお母さんが残してくれた技術、後は二人が命がけで守ってくれた私自身」

そして、今は預かってもらってる私の妹、私が守りたいのはそれだけだ。

「……ふぅん、でもその為には実力が足りない。だからその力を手に入れるためにあなたは家出したのね」

「うん、そうだよ」

「……あっはははははは！　馬鹿だ！　馬鹿がいる！」

暫くの沈黙の後、御影さんはそう言って笑い始める。な、何がおかしかったの……？

「どうせアテはあるんだろうからそれを前提に一つ、仮にそのアテ

の所に行ったって剣を教えてくれるとは限らない」
「……あ」
「二つの、さらに仮にだけど、教えてもらうとしても莉紗に剣術の才能がないかもしれない。まぁ、あり得ないと思うけど」

そう言いながら、御影さんは私のおにぎりをって、

「なに勝手に私のおにぎり食っとんじゃー！」
「いや、そこにあったから」
「確かに置いてたよ？　でもそれ私のだから、御影さんの分はないから！」
「ならば、殺してでも奪い取る」

こうして、私と御影さんのおにぎりを巡る第二ラウンドが始まった。というかこの人は本当に年上なのだろうか？　普通に疑問なんだけど。

第一話（後書き）

作者の言い訳。
一、冒頭のシーンについて＞ちょっとやってみたかったのと、両親の死に際を少し書きたかった。
二、莉紗の貰ったものについて＞現段階では不明。ぶっちゃけそこまですごいものではないと思います。
と今回はこれくらいです。次回も書きあがったら更新したいと思います。……いつかは分かりませんが。それではまた次回！

第二話　夜空の襲撃、走る白刃（前書き）

なんとか更新できました。それでは第二話どうぞ。

第二話　夜空の襲撃、走る白刃

――――拝啓、地獄にいるお父さん、お母さん。元気ですか？
私は元気です。さて、早速なんですが、実は私――――

「……ねぇ、御影さん」
「……なにかな？」
「ここ、どこですか？」
「……どこだろうね？」

――――迷子、という名の遭難にあいました。こんな時って一体どうすればいいんでしょう。いろんな本を読んでいる私でも流石に遭難した時の対処法なんて本は読んでませんよ。

「というかどうするんですか？　このままじゃ確実に行き倒れですよ」
「あぁ、そこは大丈夫だよ。私サバイバルは得意だから、普段から道に迷って遭難してるしそういうのは得意だね」
「……そんなので大丈夫なんですか？　放浪者として」
「……全然。かなりの頻度で行き倒れしかける。そして、かなりの頻度で三途の川を渡りかけた事か、渡し人がサボり魔だったから助かったものの下手したら今頃死んでたよマジで」

……拙い、この人かなり危ない人です。方向音痴的な意味で。なんで私はこの人と一緒に行動しようとしたんでしょう。いくら目的地が同じとはいえ、これは酷すぎでしょう。いえ、本当に、

「とりあえず、野宿の準備をしましょう。話はそれからです。御影さん、食べ物はなにかありますか？」
「んー、生米が二、三人分あるけど、水がないから研げないし、おかずがないから白米オンリーになるよ。まぁ、そこらへんの野生動物を狩れば別だけど」
「……え？　狩り出来るんですか？」
「出来るよ？　寧ろ余裕」

なにそれワイルド過ぎます。でもこれならなんとか食事にありつけそうですね。

「なら御影さん、御影さんは食べ物の調達をお願いします。火とかお米を研ぐのは私がやっておきますので」
「それは構わないけど……出来るの？」
「多分なんとかなります。いえ、なんとかします」

そう言って、私は近くにあった手頃な木の棒に以前作り出したものを燃やす性質を付加する。すると木の棒から炎が出始める。

「……へぇ、驚いた。莉紗って異能持ちだったの？」
「異能って……。まぁ異能っていえば異能なんでしょうけど」

でも、異能って言葉はあまり使って欲しくないですね。だって異能っていうのは人とは『異』なる『能』力という意味だ。それって自分が人とは違うと再認識させられるじゃないですか。

「それで、一体どんな異能なの？」
「えーと、あんまり話したいくないんですがまぁ、いいでしょう。私の能力はですね……よく分からないんですよね」
「……え？」

「いえ、ですから、私の能力っていまいちよく分からないんですよね」

前に言ったように性質を作り出して付加する能力だとは思うんですけど、作れない性質もありますし、いまいち威力が出ませんし……、

「そうなんだ……、因みに一体どんな性能を持つ異能なの？」

「なんでそんなに興味津々なんですか？　別にいいですけど。えーっとですね、性質を作り出してそれをものに付加する能力……でいいんでしょうか？」

「なんで疑問形なのよ？　というかどういう事なのそれって」

「だからなんでそんな興味津々なんですか？　簡単に言うとですね。頭の中でものを燃やす性質を創造して木の棒に付加すると木の棒はものを燃やす性質を得るんですよ。この能力を付加した事によって付加した木が燃えることはありませんし、私も火傷する事はありません」

「……創造系の異能？　ずいぶん珍しい異能ね」

なんですか創造系って、初めて聞きましたよ。というか珍しいんですかこれ？

「簡単にいえばものを作り出したりする異能ね。発火能力とかもこれに通ずる異能ね」

へぇ、能力にもいろいろあるんですね……。他にはなにがあるんでしょうね？

「一応他の説明すると身体強化系や干渉系などがあるね。さて、莉紗にちょっと試してもらいたい事があるんだけどいい？」

「……なんか嫌な予感がするんですがなんですか？」
「いや、ちょっとした連想ゲームみたいにいくつかの単語から性質を連想して作り出してみてくれない？」
「連想ゲームですか……まぁ、それくらいならいいでしょう」

さて、一体どんな単語が出てくるんでしょうね……？

「まずは冷たい」
「はぁ、冷たい」
「次は清流」
「ふむふむ、清流」
「最後は液体」
「成る程、液体って分かりやすいんですけど」

どう考えても水の性質ですよね？　これくらいなら何とか作れそうですね。

――――それは静かに清らかに流れる冷たい清水。

「創造（Ｂｒｉａｈ）――――」
「何故に創造界というかセフィロトの樹？」
「いえ、昔、って言っても数ヶ月前の話ですが、能力を見せた時に母が新しい性質を作るときはこう言えと言われたので」
「意外と変人なのね、莉紗の母親って（最厄の魔女も結構茶目っ気があるのね）」

変人って……まぁ、否定はしませんけど。料理は苦手、常識は結構疎く、研究馬鹿、……うん、変人でしたね。

「まぁ、でもちゃんと出るみたいだね。じゃあもう一つ、閃光」

「まだやるんですか？　一つ目は閃光ですね」
「次は超高速」
「……え？　超高速？」
「最後は轟音」
「……え、え？　轟音？　もうさっぱりなんですけど」

一体なんの性質なんでしょうか？　最初と次のだけなら光なんでしょうけど、轟音って……それ以前にどういう意味なんでしょうか？　まぁ、いいです。一応やってみましょう、

――――それは神速へと至る眩い閃光。轟音鳴り響かす一筋の閃光。

……今、突然『この時から厨二だったのか……』っていう電波を受け取ったんですが、とりあえず厨二ってなんですか……？

「……出ないわねぇ」
「……そうですね」

まぁ、当然ながらなにも発生せず失敗に終わりました。というかなにか分かりませんでしたし当然ですよね。

「因みに今のは雷の性質ね」
「……あー、雷ですか。なんか納得です」

確かに雷ってすごい音出しますものね。じゃあ、もう一度……、

「……わぁ、成功しましたね。ほんの少しですが電気が出てますね」
「……分かったわ。莉紗の異能が」

え？　もう分かったですか？　私が（疑問に思って）一年位考えても分からなかった事に能力見せて十分もしない内に分かったんですか？（因みに母は『それは自分で答えを見つけるもの』と言って教えてくれませんでした）……流石、大人の人は違いますね、性格は子供っぽいですけど、

「それで、どんな一体能力なんですか？」
「多分ね、『自身の理解している性質、または新しい性質を作り出す』異能と『性質を操作する』異能を複合した異能ね」
「性質を作り出す能力と性質を操る能力……ですか？」
「そう、さっき火や電気や水を作り出したのは莉紗の性質を作り出す異能、木の棒に付加したのは後者の異能のおかげね。だけど異能が発動するにはいくつか条件があるっぽいわね」

えっ、そこまで分かっちゃうんですか？　どこまで頭いいんですか？

「『性質を作り出す異能』はその性質を理解している事、『性質を操る異能』はそれがものである事が条件かな？」
「？？？　すいません、少し……というか全然分からないんですけど」
「まぁ、かなり難しい事を言ってるからね。でもその内分かるとは思うわよ？」

その内、ですか……じゃあその時にもう一度聞いてみる事にしましょう。

「そういえばどうして夕食前にこんな話を？　別に夕食後でもよかった筈なのに」
「それはね……そろそろ出てきたら？　いい加減その視線も殺気も

鬱陶しいんだけど」

御影さんがそう言うと、辺りの木々から黒い服の人がぞろぞろと出てきます。……なんでしょうこの人達？

「……桜御影、いつから気づいていた？」

「実は最初から気づいてたけど、何時聞こうか悩んでてね。でもそろそろ夕食にしたいし、先に片付けておきたくてね」

「……邪魔をしてくれるな桜御影。我々の目的はそこの餓鬼、川里の娘を始末だけだ」

へ？　私ですか？　理由がよく分からないんですけどどうしてですか？

「断る。残念だけど約束があってね、この娘を殺される訳にはいかないの。悪いけど、妨害させてもらうよ」

「……だったら貴様ごと始末するだけだ！」

そう言って襲いかかってくる黒い服の人達。こ、これってまずくないですか！？　という私の恐怖とは裏腹に御影さんは飄々としていて、

「莉紗、この世界で上手く生きていく方法はね……」

突然御影さんはそんな事を喋り始めます。そして、

瞬間的に何かが煌めく。

「彼我の戦力をしっかりと見極めて、敵わないと判断したら迷わず逃げる事よ。というかあんた達数で勝てればなんとかなるとでも思

ったの？」

その言葉とともに五、六人いた襲撃者は全員地に臥しました。す、すごい……でも、

「……死んだんですか？」

「いや、峰打ちだから死んではいないよ。流石に六歳児の前で殺人はしないよ」

そうですか……よかったんでしょうか？　でも命狙われましたし……ちょっと複雑なところです。

「あ、莉紗。ちょっと姿勢を低くしなさい」

「え？　姿勢をですか？　いいですなん――――ッ！」

「うーん、相手もいい腕ね。莉紗の頭があった場所を正確に狙って来たわね」

「そそそんな事言ってる場合じゃないですよ！　ナイフが、私の頭上にナイフが！」

こ、怖すぎます！　本当に頭すれすれの所にナイフが突き刺さっていて本当に怖すぎますよこれは！　というか御影さんはなんで投げナイフを見事にキャッチしてるんですか！？

「莉紗、一応これを持っておきなさい。いざっていうときは役に立つと思うから」

そう言われて私は御影さんが掴んでいたナイフを受け取ります。でも、

「……私に戦う能力は微塵もありませんよ？」

「うん、そこは期待してない。ただ最低限自分の身は自分で守ってね」

……それって遠回しに戦えって言ってますよね？　この場において腕力、体格全てにおいて最弱な私が戦っても瞬殺されるに決まってるじゃないですか。絶対に無理です。

「ま、保険みたいなものだから最悪な事態にならない限り戦わせないから、安心しなさい。……でも、いつでも逃げれるか戦えるように準備しときなさい。こっからは本当に殺し合うかもしれないから。……これは今日の夕食はまだまだ先かな？」

そう言った瞬間、先ほどまでの雰囲気とは一転し、とても張りつめた雰囲気が周囲を支配する。ナニカ冷たく鋭いモノが私の身体を容赦なく貫いていき、突然足の力が抜けていき、地面に膝をつく。そのまま意識も落ちそうになりますが、その一線だけは越えないようにギリギリの所で持ちこたえます。

「ん？　莉紗、まだ意識あったの？」

「まだって……当たり前……じゃないですか……ここで気絶なんて……したら、確実に死にそうですし」

「そうね。でも――――」

そう言われた瞬間、首筋に衝撃が走り、完全に意識が闇に落ちます。御影さん……一体なにを……？

「しばらく寝てなさい。起きたら全て終わらせておくから」

「さて、出てきなさい。莉紗は気絶してるから心置きなく戦えるわよ」
「はっ！　気が効くじゃねぇか！　これで気兼ねなくお前と殺しあえるぜ！」
「そうだな、そこの餓鬼を殺すだけならすぐにでも出来る。それだけではつまらんからな。女なら最強クラスとも謳われる貴様の首もいただくとしよう」
「しかしいいのか？　こちらは三人、そちらは一人、川里の娘は戦力外とはいえ、そっちの方が不利ではないか」

私の呼びかけに応じたのか木の影から三人の男が出てきた。確か……三人とも最近名が売れ始めた戦闘屋だったっけ……？　名前覚えてないけど。それと、戦闘屋の一人がそんな事を言ってきているけど、

「不利？　舐めるなよ三下ども、あんたら如き、同時に相手にしてもお釣りが出てくるわ」
「ざけるなよこの糞女ぁ！」
「少し教育を施したほうがいいようだな！」

「あ、馬鹿っ！」

私の挑発に引っかかった男二人が片方が銃とナイフ、もう片方が槍を構えて突撃してくる。最後の一人は冷静に静止の声をかけるが残念ながらもう遅い。私は刀の一本目を取り出し構え、槍を持っている男に肉薄する。

「なっ！？」

「槍の弱点、確かに槍は長いから槍とか相手にするには有利かもしれないけど、至近距離、そう、それこそ刀の間合いまで詰められると役に立たない」

「だったらなんだ！　その為に俺がいるんじゃねぇか！」

「残念だけど、そっちは決定的に遅すぎる。それじゃあ私は捉えられない」

槍を持つ男が槍で防御して刀を受け止め、その瞬間に銃を持つ男が何発か発砲する。しかし、

「秘技、乱れ桜」

そう告げた瞬間、無数の斬閃が走り、弾丸を全て切り裂く。それに驚愕して男は一瞬フリーズする。だけど一瞬の隙が命取り、私は銃を持った男に接近して刀を振り抜く――――、

「自業自得とはいえ……！　流石に……仲間を斬られる訳にはいかないからな……！　止めさせてもらうぞ！」

前に最後の男、西洋風の剣を持った男に止められる。……ふむ、槍使いはそれなり、銃持ちは微妙、剣使いは将来有望って言った所ね。流石に今は無理かもしれないけどいずれは強くなるかもしれな

いわね。……銃使い以外、

「よくやった！　死ねぇ、桜御影ぇ！」

「はぁ……、舐めるな、真技、緋皇桜花」

剣使いが身を挺して守ってくれたのに一旦距離も取らずに、ナイフで私に斬りかかって来る銃使い。流石にイラッと来たので刀から炎を出して銃使いの身体を炎で包み込む。

「ぐぁぁぁぁ！　熱い！　熱い！」

銃使いは炎に焼かれてのたうち回るが、この程度の人間なら全身火傷位の火力しか出ないだろうから死にはしないだろう。

「……さて、まだやる？　これ以上は少し本気を出すけど」

「……降参だ。これ以上やっても意味がない」

「そうだな。悔しいが俺たちじゃ歯が立たない」

そう言ってのた打ち回っている銃使い以外は武器を捨てて両手を上げる。私は鞄の中にしまっていた縄で先程倒した暗殺者と男二人を縛り始める。縛ってる途中で、

「糞ッ……！　こうなったら餓鬼だけでも……！」

とか言って、莉紗に襲い掛かろうとしたので、もう一度炎で焼いて縛っておいた。よし、これで一件落着ね……。ふぅ、今回は守らないといけない子供がいたから一段疲れたわ……早く莉紗を送り届けてリラックスしたいわ……。

第二話　夜空の襲撃、走る白刃（後書き）

作者の言い訳
その一、御影の強さについて＞この作品ではかなり強いキャラです。
その二、莉紗の能力について＞御影の推理で大抵アあってます。ただ、根本的なところが間違えています。
その三、いつも中途半端に終わることについて＞一応キリのいいところで終わらせてるつもりなんです。のんびりと続きを持ってくれるとうれしいです。
という感じで今回はここまでです。それではまた次回お会いしましょう！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3174z/

神凪町奇想譚

2011年12月25日00時55分発行